

柳葉魚が食べたくなって書いた。

硯

この物語はフィクションです。実在する人物及び団体及びシヤモとは、一切関係ありません。異論は認めない。

梅雨が明け夏の香りが町を漂い始める中、流行に敏感な私はさつそく時代を先取りするべく、自宅のリビングでオン・ザ・ソファアールして横になっていた。

「休みだからってあんまり寝てばかりいると牛になるよ、鈴莉さん。ほら」

エアコンを止め、扇風機の電源を入れた志染<sup>しじみ</sup>さんは、そう言いながら薄手のタオルケットを私にふわりと被せ、隣にある一人掛けのソファアールに腰を降ろした。

「鈴莉さんがなんと言おうと、夏バテってちつともファッション性のあるものじゃないと思うんだよねー。エアコンに頼って冷房病併発されても、風邪引かれても、なんだかいらいらするし。こっちで我慢してね」

「それは全然構わないんだけどさ、志染さん」

私は真剣な眼差しを向ける。

「はい」

「一日無心に寝そべり続けてなんだかすぐおなか为空いたので今日は早めの御夕飯と致しませんか、できればがつり系がいいです」

私は（何食わぬ顔で）真剣な眼差しを向ける。

「少し、待ってください」

雰囲気ってすごい。

志染さんはふう、と息を一つ吐いてテーブルに積まれていたチラシを一枚ずつ広げ始めた。時計の針は一八時を回るところであったが、外はまだ明るく、都合よく夕涼みとはいかないだろう。

しかし空腹は事実である。

「……、あーそういうこと……」

「？ なにが？」

彼女の表情に僅かではあるが呆れが混じった。恐らく何かに気づいたのだろうが。

「鈴莉さん」

「はい」

なぜか呆れた視線が送られてくる。

「鈴莉さんは五月病だよ。きつと再発したんだろうね」

……………

先取りしていたつもりが、むしろ遅れていたと？ 笑い話ではないか。根拠となる論文の提出を求めたいところだ。「というわけで、明日からいたわるのをやめるから。早めに復帰してね」

志染さんはエコバッグを取り、黄色っぽい御当地ゆるキヤラキーホルダーの付いた車の鍵をくるくる回しながらリビングを出ていった。

いつてきまーす。と声がして玄関の方からガチャリと音が鳴る。……………。テレビでもつけよう、流行を取り入れるために。

ガチャリ。

「ただいま！ 鈴莉さん御飯炊いといて！ いつてきまーす！」

ボタン、ガチャリ。

「……いつてらっしゃい」

完全にいつものテンションに戻られてしまった。という

よりは、気を使わせてしまっていたようである。

洗濯物でも取り込んでおこう。

私は炊飯器のスイッチを押した。

西の空に若干夕陽の余韻が感じられ、町を照らす明かりが人工のそれに変わり始める頃。ピー、ピー、と音が鳴り、しばらくして玄関の扉と炊飯器のフタがほぼ同時に開いた。「ただいまおかえりー」

手にしたしゃもじでふんわりと米をほぐすようにしてまぜ、空気を含ませてから蒸らしに入る。どこから得た情報というわけでもないが、何となくこっちの方が美味しくなるような気がする。ただしその実は炊きたて蒸気の香りが好きなだけである。

「鈴莉さーん、おーい。ただいまー」

名残惜しんでフタを閉める。

「私は炊きたてのお米に負けたのか」

「あ、志染さんおかえり、帰ってたんだけ。まだ蒸らすよ」

「しかも素だったかー、淋しいなー」

巢立ったらしい。何かが。ツバメでも近所にきていたの

だろうと予想したが、それ以前の文脈的にきつと違う。ただ、志染さんは文脈クラッシュャーなので正答はそれこそ巢立ち済み、空の彼方である。フライアウェイ。

「買い出しお疲れ様。何かいい収穫はあった？」

「ん？ ポチポチって感じかな。広告の品は総崩れだったけどちようどタイムセールが始まってさ。なかなかコレの中身は充実してるよ」

志染さんはご機嫌に戦利品入りのエコバッグを掲げ、あそここの売場担当者、絶対私に気があるわー、と一人ごつのであった。

「そうそう鈴莉さん、やや話題が変わるんだけどさ」

「何？」

エコバッグを調理台に置き、彼女は一瞬言葉をためた。台所の窓から見えるお隣さん宅に灯りが点る。彼女は少し目を細めさせる。口元にも少し力がこもっているようだ。

話は変わるんだけどさ、と志染さんは仕切り直した。

「——シシャモって美味しいよね」

文脈クラッシュャーここに極まれり。あれ、ブレイカーだったっけ？ (腑に) 落ちないことに定評のあるブレイカ

ー、ここに極まれり。

「うん、過程はともあれ否定はしないよ」

話題が魚類になるなどと思ってもみなかったことは墓場まで持っていく秘密である。

「カリッと焼いてさ、じわあつていい具合に脂がのつていたりしてさ」

「まあ分かるよ。子持ちシシャモとか美味しいもんね。日本食……っていうよりは、日本の食ってイメージかな。簡単な品ではあるけど、忙しい朝にでてくるには申し分ない一品だと思う」

「シンプルいずベストとはまさにシシャモのためにあるよ  
うな言葉だよね」

「いや、そこまでは思わない」

何故こうなったかは全く分からないが、目の前に広がる現実、このシシャモ推しである。

「——一口で頬張ってさ、鼻に香ばしさが抜けていく感覚とか、あの華奢な見た目を裏切る高ポテンシャルだよね。

「焼いた柳場魚」に「お味噌汁」と「沢庵」が添えられたらもう米騒動だよ！」

意味違う。なんとなく伝わるけど。

グルメレポーターにでもなれるんじゃないだろうか、むしろ口にしていないものをここまで表現するという点では……。などと一瞬思ったことはさておき、身振り手振りを交えることなく、蛇口を捻ったかのように流れ出てくる言葉の数々を聞いていると――

——— なんだか無性にアレが食べたくなってくるではないか。

私の口は、いつの間にか万全のシシヤモ受け入れ態勢をとっていた。小さく弾ける卵食感が待ち遠しいことこの上ない。

「志染さん」

「はい？」

「夕御飯はどのようでしょうか」

話の流れからして、意図まる分かりの質問であろう。

「焼き肉と焼きシシヤモどっちがいい？」

右手、左手の順に挙げ、問いかける。

究極の二択を迫られた。生まれて初めて聞く組み合わせである。しかしながら、コンマ数秒の戸惑いこそあれ、決

断は揺らぐことなく後者であった。志染さんのことだ、きつと肉なんて最初から買ってきていないのだろう。というのはあくまで希望的観測である。

彼女の左手を両手でひしと掴み、後者の意を伝える。シチュエーションが違えば多少なりともロマンチックなワンシーンであったことだろう。

「と、というわけですね、本日の夕御飯は」

「はい」

「なんと！」

「うん！」

「久しぶりに！」

「おお！」

「食べたくなったので！」

「ええ！」

「セールで安かったし！」

「来い！」

握る手に自然と力が入る。

「驚きの！」

「早く言いなさい」

「……はい」

というやりとりをこの後二回ほど繰り返したので割愛。

決して手をずつつないでいる描写が恥ずかしいからではない。

「——買って参りましたコチラ！」

「きたー！」

神々しい光を放ちエコバッグから御身を現す純白のトレ  
ー。羽衣にも似た曇りのないラップ。そしてその中に整列  
する複数の魚影！ これはまさしく——

「妻子持ちカラフトシシヤモです！」

やっ、やった……のか？

………

………

旦那ではないか。

裏切られてはいないはずだというのに、どこからともな  
く漂ってくる裏切られた感。とにかく何かがおかしい。

私の無言に気づいたのか、志染さんは商品のラベルをよ  
く見る。妻子持ち、サイシモチ。間違いなく間違っている。

志染さんは輸血してあげたくなるほどに顔から血の気が引

いていった。

「いや、まだわからないから」

「志染さん無理じゃなくていいよ」

「いや、わからないから、そういう時代だから……うん」

自ら持ち上げていただけに、子持ちシシヤモでなかった  
ことのダメージが私の比ではないようだ。がっくりと肩を  
落とした彼女は、俯きながらも、放していた私の手に腕を  
伸ばし握り返し、自らの額まで持ち上げる。

「お肉かってくればよかった……ごめん、鈴莉さん……」

悲しい形で予想が当たってしまった。絶望的観測であつ  
たなどといった誰が気づけたらうか。彼女は何も悪く  
ない、悪いのは売場担当者である。シシヤモの神よ、罪深  
き売場担当者になんだかこう、具体的な鉄槌を。シシヤモ  
アレルギーとか。

ラベルに小さく印字された「子持ちシシヤモとそうでな  
いシシヤモが一对一で入っています」の文字列を、私が認  
識するのはこの五分後であった。

「なかなか……旦那も捨てたものじゃ……ないね」

箸とご飯が止まらない。陽はすっかり落ち、ガヤガヤと鳴く遠い蛙の声とTVのニュース番組をBGMに、扇風機に首を振らせながらの、結局いつもと同じ時間帯の夕食である。食卓は例によって米騒動状態となり、今更ながら、もう一合余分にお米を炊いておくべきであったと後悔した。「飲み込んでから話さないと言ったよ」

志染さんに注意されてしまった。

でも、その幸せは志染さんが受け取ってくれるんでしょう？ と、冗談めいた口答えを、シシヤモを飲み下してか  
らしてみる。

「……………」

呆れた視線が送られたので「反省します」と言ったらク  
スツと笑われた。

どうも呆れられてばかりである。

話題の中心であったシシヤモはというと、卵に栄養を集中させない為だろうか、脂ののりやうま味という部分では、旦那シシヤモの方が豊かで、私好みの味であった。異論は認めよう。

ニュースはどこかの都市が早くも猛暑日を記録したことを伝えていた。あと数日も経たないうちにこの町にも本格的な夏が訪れることだろう。

「志染さん」

「……はい」

「秋になったら、本物のシシヤモを食べにいこうよ、北海道にでも」

せっかくだから本物も味わってみたい。味わっておきたい。

志染さんは少し考えた後、満面の笑みで答えた。

「鈴莉さんが残暑で夏バテしていなければ、喜んで」

秋が待ち遠しいことこの上ない。

私はお隣さん宅あたりから、焼き肉の香りが漂ってくるのを感じるのであった。

月刊缶じうす7月号 通巻190号  
2013年 6月25日発行

編集人 芹沢一 蒼井天優

発行所 広島大学文団BOX